

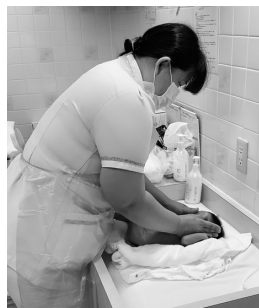


新生児センター
病棟保育士
小平 由佳

新生児センターにおける病棟保育士の役割 ～わたしたちにできること～

新生児センターは、治療を必要とする赤ちゃんを24時間体制で受け入れ、高度専門医療をおこなう病棟です。福田病院の新生児センターでは13年前から病棟保育士が勤務しています。今回は新生児センターでの保育士の役割、業務内容についてご紹介します。

新生児センターに保育士が必要とされるようになった背景の一つに、子どもをひとりの独立した人間として、精神的にサポートすることが、病気の治療として点滴をしたり手術をしたりする事と同様に大事だということがあります。様々な理由でお母さんと一緒に退院できなかった赤ちゃんの治療とともに、私たちは温かなふれあいの時間を設けることで、赤ちゃんの精神的ストレスや苦痛の軽減を図ることを大切な責任と心に留めています。



＜主な業務内容＞＝保育活動＝

- ・生活の援助
沐浴、授乳、オムツ交換、ベッド周辺の環境を整える、適宜お着替え
- ・個別保育
タッチケア、タッチング、ホールディング、語りかけ、絵本読み
手遊び、抱っこ、視線あわせ、笑いかけ、あやし等を行う
- *疾患、病状と成長、発達、個性を踏まえ、児の成長が促されるような遊びの提供
継続的なふれあいを行うことで、治療や入院、母子分離に伴うストレスと発達や情緒への影響が軽減、解消される事を目指しています

『赤ちゃんとのふれあいで大切なこと：言葉掛けと笑顔』

GCUに入院している赤ちゃんたちの面会に来られるお母さんやお父さんは、沐浴や授乳、抱っこをして赤ちゃんとの時間を過ごします。優しいまなざしでわが子を見つめ、笑顔で話し掛けながら抱っこをしている姿はとても微笑ましく、印象的です。そして赤ちゃんも、ご両親にたくさん触れてもらった後は気持ちよさそうにすやすやと眠り、その姿を見てご両親も安心してGCUを後にされます。

しかし、ご両親が帰ったことが分かるかのように、しばらくすると赤ちゃんが泣き出すことがよくあります。赤ちゃんはご両親が帰ったことで、安らげる存在を感じることができなくなり、不安に陥っているのではないのでしょうか。お母さんも出産直後であったり、遠方からの面会であったりとさまざまな事情でゆっくり面会出来ない事もあります。そこで、私たち保育士が積極的にふれあうようにしてい

ますが、そのときに大切にしていることは言葉掛けと笑顔で接することです。不安を感じている赤ちゃんを安心させるために、ご両親が赤ちゃんに向けているのと同じような笑顔で接すると、赤ちゃんも落ち着きます。落ち着いた赤ちゃんを目を合わせて言葉掛けを行うと、保育士を見つめ、安心した顔を見せてくれます。そして、赤ちゃんが不安から解放されて、再び眠ることができるように、できるだけご両親と過ごしていた時と同じ、穏やかな時間を赤ちゃんに提供することを心掛けています。特に赤ちゃんが安心して眠ることは赤ちゃんの情緒を安定させ、良好な成長発達にもつながっていくと考えています。

お母さんの言葉掛けや笑顔にはかないませんが、これからも赤ちゃんに笑顔を向けて、安心を与えていきたいと思っています。

『壁面の効果：季節を感じてもらう』

新生児センターの景色は、保育園や幼稚園をフィールドにしてきた私たち保育士にとって、どちらかというと殺風景に映りました。この景色を少しでもかわいく、そして楽しい雰囲気に変えるために壁面を飾りつけるようにしています。

飾りは季節ごとに変化させます。例えば夏はたくさんのひまわりの花を、秋には木の実や紅葉、クリスマスやお正月などの行事ごとにも飾りを変えています。このことで、病棟内の雰囲気も変わり、今まで感じられなかった季節を感じられるようになりました。新生児センターに入院している赤ちゃんたちが直接壁面を見て楽しむことはできませんが、面会に来られたご家族にご覧いただくことで、赤ちゃんに語りかける話題の一つになってくれるといいなと思っています。



・環境設定
季節ごとに壁面装飾を製作。
病棟内の装飾を行う

『家族支援：病棟保育士にできること』



＝家族支援＝

- ・制作活動
百日のお祝いなど要望があれば、お祝いカードを作成し、手作りのお祝いの衣装を着てご家族と写真を撮り、簡単なお食い初めをする。育児ノートに貼る季節の折紙を折る

保育士は主にGCUの回復期にある赤ちゃんとそのご家族に向けて、個別保育や制作活動をおこなっています。一方、NICUの赤ちゃんに対しては、治療の主体が安静保持ということもあり、一日も早い回復を祈ることしかできませんでした。時々、NICUに入院している赤ちゃんの担当看護師から百日のお祝いの制作活動の申し出があります。直接関わることはできませんが、私たちがつくった制作物を通じてお母さんたちに寄り添うことができればと思っています。また赤ちゃんのご家族と関わる中で、ご自宅に帰っても赤ちゃんの育児に対しての不安が少しでも軽減できるように、積極的に抱っこやオムツ交換・赤ちゃんが泣いた時どのように対応すれば安心してもらえるかをお伝えしています。わたしたちがお母さんたちを支える形を探し続け、今後も保育士の役割の一つとしての家族支援ができたらいいと思います。

出産後の生きていく環境が激変したときに、新しい環境に慣れよう！！と、目も耳も肌も全ての神経を全開にして情報を受け取っていかようとするのは、たとえ小さく生まれた赤ちゃんであっても、疾患を持って生まれてきた赤ちゃんであっても皆同じです。お母さんがそばにいない間も、わたしたち病棟保育士が「人」のぬくもりや、気持ちを届けようとしたら赤ちゃんはきっと受け取ってくれるはずです。そのための大切な役割をしっかりと果たし、日々邁進していかなければと思います。